

自然環境の学習から系統地理的考察のポイントを考える

埼玉県立浦和高等学校 浅川 俊夫

始まった新課程での地理学習

新しい教育課程における地理Bの学習がはじまってから半年が経つ。「地理」に関して、科目の統合や新設がなかった今回の改訂では、学習内容の点でも授業担当者の意識の点でも、比較的スムーズに旧地理Bから新地理Bへの移行が進んでいるように見える。

その理由はいろいろ考えられるが、最も大きな理由は、系統地理的考察と地誌的考察という、地理独自の方法にもとづく学習が、地理Bの中核的な学習として位置づけられたことにあるように思う。このことによって、曖昧であった地理学習の進め方が、系統地理と地誌からなる地理学の手法や成果を取り入れて学習を進めるという形で、明確に示されたといえよう。それはまた、これまで疎遠だった地理教育と地理学の関係が少し近くなったといってもよいのかもしれない。

本稿では、系統地理的考察にもとづく学習につ

いて、これまでに取り組んだ気候、地形といった自然環境の学習を展開するなかで、筆者が考える進め方のポイントを紹介し、ご批判を仰ぎたい。

成因や原理の追究で進める学習

学習指導要領では、系統地理的考察を、取り上げる事象を決める段階、分布図などを読み取る段階、分布の特色や規則性などを分析する段階、そして事象相互の関係を考察する段階の、四つの段階あるいは過程に分けている。

新しい教育課程全体にわたり「学び方を学ぶ」学習がめざされ、地理Bでも地理的な見方や考え方の育成が目標の一つとなっている中で、それに最もかわりが深いのは、四つの段階・過程のうち、事象が「なぜそこにあるのか」を考える三番目の段階・過程だろう。ここを重視する学習を考えると、それは事象の成因や原理の追究に踏み込んで進める学習になるだろうし、気候や地形といった自然環境を扱う学習では、こうした学習がと

くに有効であると考えられる。

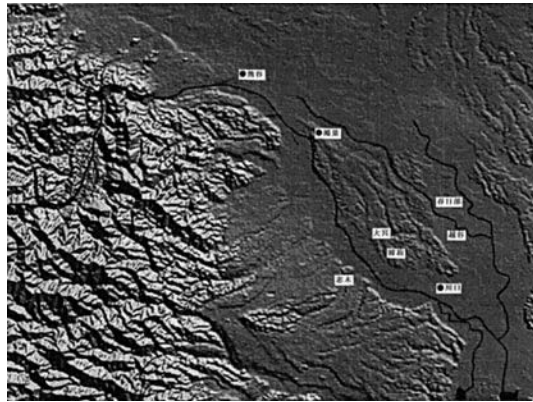
気候学習を例にとると、降水はどんな条件下で起こるのかといった降水の原理を追究することで、既習の多雨地域、乾燥地域がわかるだけでなく、未習の地域が多雨なのか少雨なのかを推測することが可能になる。「覚える地理」の代名詞のようにいわれるケッペンの気候区分でも、ケッペンがなぜそうした区分を考えたのか、どんな考え方で区分したのかを追究あるいは追体験すれば、未習地域が属する気候区を予測し、それをもとに気候の特徴が推定できる。地形学習では、プレートテクトニクスの考え方をもとにしなが、大規模な山脈や弧状列島、海溝の成因や分布の原理・規則性を追究する学習が考えられるし、沖積平野や洪積台地の成因を踏まえて土地利用や災害などとの関連を追究する学習もおもしろいだろう。要するに、系統地理的考察にもとづく学習では、どこに何があるという事項の単純な地理的把握から一歩踏み込んでみることが、まず必要なポイントであるといえよう。

身近な地域の事例を取り入れて進める学習

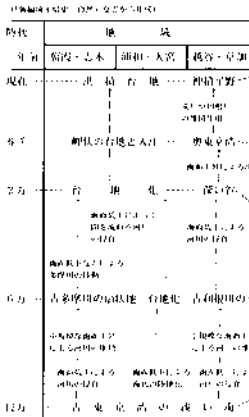
系統地理的考察にもとづいて自然環境の学習を進める際に犯してしまいがちな誤りは、人々が暮らす空間を離れて、理科的な取り上げ方になってしまうことである。自戒を込めていえば、現実の世界あるいは自分たちの住む地域を対象としてこそ、地理の存在価値がある。このため、系統地理的考察にもとづく学習では、事例として取り上げる地域の一つに身近な地域を入れる必要があると考えている。また、それは、新たな知識の負担を少なくしたり、学習意欲を高めたりして、分析や考察の過程が重視される学習を可能にするだろう。

海面変動と埼玉県平野部の地形

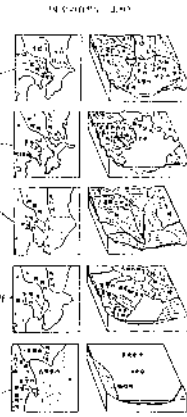
【埼玉県平野部の地形】



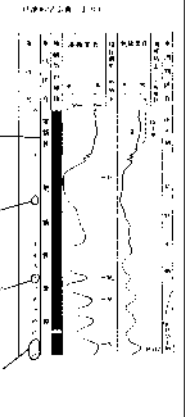
【埼玉県平野部の地形変遷】



【関東平野の古地理】



【気候と海面の変動】



資料1 身近な地域を事例にした地形学習

気候学習で考えると、たとえば身近な地域で起こる降水現象を事例として取り上げることによって、前述した降水の原理を追究する学習が意欲的に進められ、実感をともなったよりわかりやすいものになるだろう。地形学習の場合は、気候学習にもまして事例に身近な地域を取り上げることの効果が期待できる。自分の家や学校のある地域にみられる平地や崖、台地といった地形がどうやってできたのか、微妙な地形の違いが土地利用や災害時の被害状況の違いとどう関わっているのかなど、追究の主題には事欠かない。また、日々歩いている

道、自転車で登る坂、電車が通過する橋やトンネルなど題材も豊富にある。筆者の場合は、前ページにあげたような埼玉平野の地形に関する資料を用いて学習を進めている。

地理的技能を反復練習する活動

最後のポイントは、これまでの二つとは少し違って、系統地理的考察にもとづく学習でも、分析や考察の過程を重視する活動と同時に、それに必要な地理的技能を反復して練習させる活動が欠かせないという点である。いってみれば地理学習にも「百マス計算」を取り入れてみたらどうだろうか。

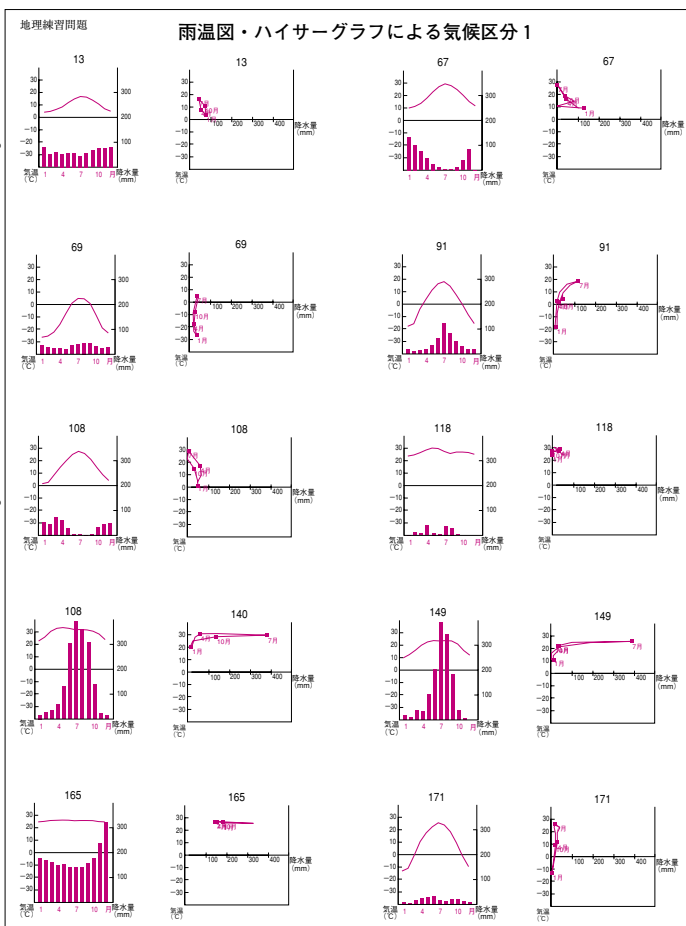
地理全体にわたって、何が求められる地理的技能かについては議論すべき余地があるとしても、たとえば地形学習で大縮尺地図から起伏や土地利用を読み取る技能や、気候学習において雨温図・ハイサーグラフを描いたり気候の特徴を読み取ったりする技能は、系統地理的考察だけでなく地誌的考察にも主題的考察にも不可欠といっていよう。しかし、それを反復練習する活動が確実に取り入れられるのは、地理Bでは系統地理的考察に基づく学習の場面しかない。

さらに、本音をいえば、予想される地理Bの大学入試に、手っ取り早く、かつ確実に対応する手段としても地理的技能を反復練習する活動が求められている。

右上の資料は、筆者がつくった、センター試験などの気候分野でよく出題されてきた場所の雨温図・ハイサーグラフ気候区判定問題である。「気候の百マス計算」とよんでいるのだが、昨今は考える教材より、こういった教材なら熱心に取り組む生徒が増えているように思えるのも現実である。

おわりに

筆者の勤務校では、地理Bを、1年次に2単位、



資料2 「気候の百マス計算」

2・3年次のいずれかで2単位という形で分割して履修することとしている。そのため、正直なところ新教育課程1年目の今年度は、まだ来年度以降の全体を見通した学習指導の計画を立てきれないままに授業を進めている状況である。この半年間の実践を踏まえうえて指導計画を立て、系統地理と地誌を両輪として現代世界の地理的認識をめざすという科目の特質を持つ新しい地理Bが広く履修され、定着した科目になるよう、指導内容の充実に努めたい。